

荷風『断腸亭日乗』の一考察

— 国内亡命者，経済生活，岡山での終戦 —

A Brief Time Travel with Nagai Kafû

(1993年4月7日受理)

沖田 健吉 清水 教子
Kenkichi Okita Noriko Shimizu

Key words: 個人主義，自覚した市中観察者，流離と郷愁

I 『断腸亭日乗』の位置づけ

永井荷風とトーマス・マンというのは、いかにも唐突な対比である。若年の折に短期間だがフランスに滞在し、フランス語の原書を読み、第二次世界大戦中、古書店で仏書をさがし出しては喜んでいた荷風にとって、ドイツの文学はまったく無縁のものであったろうし、仮にトーマス・マンのものを手にとったとしても、ほとんど読まずに投げ出しては違いない。昭和14年10月18日「夕刊の新聞紙，英文聯合軍戦ひ利あらざる由を報ず。憂愁禁ずべからず」^{註1}と書くように、荷風はドイツを憎み、その敗戦を願っていたのである。しかし、トーマス・マン^{註2}は生年と没年を荷風より4年先行させて、同じ80年を生きているのであり、共に軍国主義的な政治権力のもとで文学的な営為を続けたという点に共通点をもつ。

マンは、1933年、ナチスに追われ、後年「住みなれた生活の土台、家も土地も書物も記念の品も財産も失われたあのショック、——しかも祖国にいた人たちのあの嘆かわしい行動、排斥や拒絶がそれに加わる——は、十分につらく、息のつまるようなものだったのです」^{註3}と書くような状況のもとに、フランス、スイスを経てアメリカに亡命し、「この巨大な、自由の国」^{註4}のカリフォルニアから故国に向かって非難の矢を放ち続けた。例えば、既にドイツの敗色が濃厚であった1943年10月の講演で、国内亡命者の立場を代弁しながら、彼らには「ドイツの敗北よりももっと恐れているものがある。すなわちそれは、ドイツの勝利であります」^{註5}と述べる。道理に背いた政治権力のもとにあるドイツ。その勝利は「全世界の願望と期待にもまったく反する大きな不幸である」^{註6}とし、「ドイツ国内にいる多くの人々にとってもわれわれにとってもまったく同様に祖国は他国に変じたのです。そしてそこにいる数百万を数える“国内亡命者”は結局、あなたがたがつける結着を待ち続けております」^{註7}と云う。この「あなたがた」というまでもなくマンが滞在していたアメリカを盟主とする連合軍を指すが、自浄能力を失った故国の敗北を願望する姿勢は荷風にも共通するものだった。マンの規定を使えば、日本の「国内亡命者」といわれてもよい荷風は、昭和16年6月20日の『断腸亭日乗』に「余は斯くの如き傲慢無禮なる民族が武力を以て鄰国に寇することを痛歎して措かざるなり。米國よ。速に起つてこの狂暴なる民族に改悛の機会を與へしめよ」^{註8}と書き、昭和18年9月28日には「また生きのびて武断政府の末路を

目撃するも一興ならむ」註9と書いた。ここで両者は、表現は異なるものの、ほとんど同じ考え方のうえに立っていると云わざるを得ない。

しかし、マンは、「ドイツないし、ドイツ国民は絶滅ないし、抹殺されるべきではありません。粉碎されなければならないのは、不幸をもたらす権力連合、ユンカーと軍部と重工業との、世界を脅かす同盟なのであります」註10と云って、一応冷静に敵の所在を明らかにしている。さらに、ナチスがユダヤ人への迫害や血迷った文化政策を実施したさい、「当時ドイツの知識人たちが、医者、声楽家、教師、作家、芸術家たち、世界的名声を得ていた人たちがみな、この恥辱に対して立ち上がりゼネスト宣言したならば、多くは事態とことなつて進んだかも知れないのです」註11と云う。この言葉は、「私はなぜドイツに帰らないか」という理由を、マン特有のレトリックを駆使して展開した文章の中に見出されるので、解釈には慎重さが要求される。絶対に立ち上がるはずのない人々を引き合いに出して、マンのドイツへの絶望をアイロニカルに表現したものなのか。あるいは本当に連帯の力を信じていたのか。いずれにしても荷風であれば、書くことはない言葉である。もともと反体制のための「連帯」など自分の辞書に入れていない荷風は、大政翼賛会だとか官製の文化活動だとかの横行と、そういう時流に迎合していく文学者の姿を見て、ますます絶望を深めつつ、たわむれに作られた遺書の草案には、「一、余は日本の文学者を嫌ふこと蛇蝎の如し」註12という条項を入れた。

荷風の「人間」や「国家」のとらえ方はいかなるものであったか。磯田光一（1979）は『ふらんす物語』に所収の「モーパッサンの石像を拜す」註13に現れた「愛だの、恋だのと云ふけれど、つまりは虚偽の幻影で、人間は互に不可解の孤立に過ぎない」註14、それでもそういう人間が集まって日常生活を送り、社会を構成していくとすれば、「友情だの朋友の義務だのと云つても、それは要するに実行の出来ぬ虚偽の考で、若し、自分なり、彼なり、異郷に病んで餓死でもする場合には、お互に食ふものまで分ち、着て居る衣服まで脱いで助け合はうと云ふ程、立派な決心のないことをば、よく能く知り抜いている」註15という境地に到達せざるを得ないと指摘している。「人間は互に不可解の孤立にすぎない」という言葉と、ホッブスの「万人による万人の斗争」という自然状態の規定の間には、ほとんど距離はない。であるから、磯田光一（1979）が次のように述べているのは、妥当であるというべきであろう。

ややアイロニカルな姿勢で、国家をこうみざるをえなかった荷風の心理には、国家にたいしても貸借をつくりたくないという意識が暗黙のうちに働いている。もとより美神^{ミューズ}に身を捧げるか否かは最終的には個人の選択にゆだねられている。だが問題をいつそう一般化してとらえるならば、美神への献身もこの世に生存する無数の個人の、ひとつの選択可能性にすぎないではないか。あるべき国家は、それをも是認するものでなければならない。もし現存する国家が、自分の都合によってそれを許容しまいとするならば、互いに関係を断つことのほうが、むしろ「相方の利益便利」にふさわしいのではないかと荷風は主張しているのである。この思想は国家の保護を受けつつ反国家の大義名分を掲げるといふ甘えをも排除し、「個人」と「国家」とを対等の重さで対比しながら、必要とあれば国家との契約すらも解除するという意味で、ほとんど西欧の“社会契約説”の国家観を思わせる。註16

このように徹底した個人主義者を装って帰朝した荷風は、1909年（明治42年）『ふらんす物語』を出版するが、それは納本と同時に発禁の処分を受ける。1910年（明治43年）大逆事件が作りあげられ、秘密裁判の末に幸徳秋水以下が翌年1月処刑された。フランスで起きたドレフェス事件のさいのゾラやア

ナトール・フランスの対応と異なり、日本では文明を擁護すべき文学者はひたすら沈黙し傍観するだけだったのではないか。事件後10年を経て、荷風は「花火」の中に有名な次の文章を書き加えるのである。

明治四十四年慶応義塾に通勤する頃、私はその道すがら折々四谷の通で四人馬車が五、六台も引続いて日比谷の裁判所の方へ走って行くのを見た。私はこれ迄見聞した世上の事件の中で、この折程云ふに云はれない厭な心持のした事はなかった。小説家ゾラはドレフエス事件について正義を叫んだ為め国外に亡命したではないか。然し私は世の文学者と共に何も言はなかった。私は何となく良心の苦痛に堪へられぬやうな気がした。私は自分の文学者たる事について甚しき羞恥を感じた。以来私は自分の芸術の品位を江戸作者のなした程度まで引下げるに如くはないと思案した。註17

荷風41歳のこの感懐については、相対立する見解が存在する。ひとつはテキストを比較的そのまま受け止める見方である。他は、「荷風は本来思想の人ではなく、また政治方面に活動し得る人でもなかった。所謂戯作者的態度たらんとした『花火』の発言も深い根底あつてのことではなかった」註18と見る。後者の見方をさらに延長すれば、荷風の戯作者的な態度、あるいは江戸趣味・花柳趣味は、彼生来の好みであり、現実閉塞への絶望とか斜に構えた抵抗などではあり得ないという批判につながっていく。註19

もう一度トーマス・マンにもどると、マンは1933年亡命という形でドイツという国を捨てた。彼に云わせれば、自発的ではなくナチスに追われたので止むなく亡命したのであるが、祖国ドイツを見限ったことは変りなく、荷風が1909年（明治42年）9月刊行とともに発禁処分を受けた小説随筆集『歓楽』の中の随筆「監獄署の窓」で述べたことをマンは実行したと見られよう。

吾等にして、若し誠の心の底から、ミューズやヴェヌスの神に身を捧げる覚悟ならば、吾等は立琴を抱くに先立って、法規おきてきびしい吾等が祖国を去るに如くはない。これ国家の為めにも、又芸術の為めにも、相方の利益便利であらう。註20

だが、マンは、それまでの文筆活動全体を通じて、ドイツが自分の中に体现されているという自負を持っている。あるいはドイツは、ナチス暴虐の報いによって滅亡するかも知れない。たとえそうであっても、ドイツは自分の中に生きつづける。こういう自負に裏付けられた使命感にもとづき、戦争中マンはBBCを通じ（55回に及ぶ）「ドイツの聴取者諸君」註21というメッセージを発信しつづけたのである。

荷風の個人主義が日本の風土の中で、特に日常生活において、とかく折り合いの悪い状況を作りだしていたことは、1908年（明治41年）の帰国当初からであり、1942年には「ふらんす物語」と「歓楽」がたてつづけに発禁処分を受けるという「吾等の祖国」のきびしい法規おきてに直面する。マンではない荷風であっても、日本からの脱出を考えてよい成行きだった。事実、秋庭太郎（1966）は、「一説に邸の一部を売却した当時、荷風は日本を去って仏蘭西に永住し、その財産の大部分をアカデミー・ゴンクールに寄付せばやと思ったものの第一次世界大戦で渡仏もできなかったところから沙汰やみになったといふ」註22と書いている。これは1916年（大正5年）のことであり、「邸の一部」とは荷風の父が建てた大久保余丁町の邸の広い部分（約500坪）を指し、子爵入江爲守に分譲したのである。さらに1918年（大正7年）、荷風は、それまで一人で住んでいた余丁町の邸の残りの部分も売却するが、註23この時もフランス移住を考えているようである。だが、それは、一種の夢の段階にとどまるものであり、どこまで本気で考えていたか疑問なしとしない。大正時代は後から考えれば、曲りなりにも大正デモクラシーの成立する時

期であり、軍部が横暴にふるまい、荷風の憤激に油を注ぐのは昭和10年代になってからであるが、この時点では、荷風は亡命あるいは海外移住を露ほども考えていない。それどころか、麻布市兵衛町の偏奇館を根城にして、連日のように銀座を中心とした出遊をくりかえしている。荷風にとって、東京は捨て切れるところではない。現実の東京は「一日に見下す路地裏のむさくろしさ」^{註24}に満ちており、「市民の生活は依然として何のしだらもなく唯醜陋なる」^{註25}に過ぎない。だが荷風は、明治の時代には江戸の、大正になれば明治の、昭和を迎えると震災前の東京および近郊の面影を讚美しながら、それが失われたか失われつつある巷の中に韜晦するのである。これは現実からの逃避であるが、もう一つ荷風の海外移住願望の代替物となったものが、1917年（大正6年）9月に起稿され、没年まで、岩波全集版で約3,000ページも書き続けられた『断腸亭日乗』に他ならない。日記を書くことは、荷風の若年からの習慣であり、1896年（明治29年）頃から断続的に行われていた。アメリカ、フランスへの外遊当時の日記が、成島柳北の「航西日乗」をほうふつとさせる文体で書かれた「西遊日誌抄」である。しかし、「それら二十数年来の日録は、『西遊誌抄』を除いて悉く荷風の手で大正七年冬余丁町宍邸の際に焼却」^{註26}された。二度にわたるフランス移住願望の表出、「されど予は一たび先考の旧邸をわが終焉の処にせむと思定めてよりは、また他に移住する心なく、来青閣に隠れ住みて先考遺愛の書画を友として、余生を送らむことを冀ふのみ。」^{註27}と書いたのに前後して「断腸亭日乗」が始められたことは、たんなる偶然の一致とは考えられないのである。

『日乗』が、通常の日記、日誌類に対する理解で取り扱われるべきものでないことは、すでに定説になっている。事実とは相反する記述、ハイライトの置き方の自由な操作、故意としか思えない均衡を失った遠近法の適用等において、それは創作である。とりあげられる題材は、荷風の愛人とのやりとり、友人との歓談、講書読書の記録、銀座等で出会う売文業者への非難、市中の流言蜚語、庶民の暮し向き、ものの値段、自分の財産のメンテナンス、軍閥の動きに対する批判、政治への痛罵等多岐にわたるのだが、どのディテールをとっても、記録者である荷風の姿がはっきりと浮かび上がってくる。このことは『日乗』が荷風にとって、真に自由な表現の場所であったことを意味している。あるいは、日常積み重なった重苦しい感情を解き放つカタルシスの場所だったといってもよい。そういう自分の王国を設定しておいて、小説を書くように日記を書いていく。それが『日乗』の方法であった。したがって、『日乗』の記述には、さまざまな技巧が適用されることになる。中でも、反語的な題材のとり上げ方と言いまわし、すべての事象を相対化するイロニーは、『日乗』のいたる所にみられる。例えば、1921年（大正10年）、原敬が暗殺されたときの記述は次のとおりである。

十一月五日。百合子来る。風月堂にて晚餐をなし、有楽座に立寄り相携へて家に帰らむとする時、樹上號外売の奔走するを見る。道路の談話を聞くに、原首相東京駅にて刺客の為に害せられしと云ふ。余、政治に興味なきを以て一大臣の生死は牛馬の死を見るに異らず、何等の感動をも催さず。人を殺すものは悪人なり。殺さるるものは不用意なり。百合子と爐辺にキューラッソオー一盞を傾けて寝につく。^{註28}

また、1943年（昭和18年）9月28日、「生きのびて武断政府の末路を目撃するも一興ならむと………」と書くのだが、1948年（昭和23年）1月3日の日録の結びの語句は「正午混堂より帰り春本『濡ズロ草紙』を草す。亦老後の一興なり。」^{註29}である。一興するものの相対化がイロニーでなければ、ここにあるものはどうしようもないニヒリズムの表れという他はあるまい。

カタルシスの場所だった『日乗』だが、その存在が知れわたったため、荷風は後難を恐れて記録に削除訂正を加える。しかし、崑多村筠庭の著作を見て、次のように書くのである。

余これを読みて心中大に慚るところあり。今年二月のころ「杏花余香」なる一編を「中央公論」に寄稿せし時、世上之をよみしもの余が多年日誌を録しつつあるを知りて、余が時局について如何なる意見を抱けるや、日々如何なる事を記録しつつあるやを窺知らむとするもの無きにあらざるべし。余は万々一の場合を憂慮し、一夜深更に起きて日誌中不平憤惻の文字を切去りたり。又外出の際には日誌を下駄箱の中にかくしたり。今「翁草」の文をよみて慚愧すること甚し。今日以後余の思ふところは寸毫も憚り恐るる事なく之を筆にして後世史家の資料に供すべし。註30

もちろん、その後の『日乗』が客観的な記述になったというのではない。相変らず、事実を反していたり、誇張されている文章を多く指摘できるのである。例えば、1945年（昭和20年）3月9日、有名な偏奇館炎上を記録した文章の中に、「唯火焰の更に一段烈しく空に上るを見たるのみ。これ偏奇館楼上少からぬ蔵書の一時に燃るがためと知られたり」註31とあるが、当時荷風のところへ出入りしていた人の証言によると、荷風はその時点では火勢に違いを生みだすような多数の書籍を身辺に置いていなかったという。註32しかし、「余は枕元の窓火光を受けてあかるくなり隣人の叫ぶ声のただならぬに驚き日誌及草稿を入れたる手鞆を提げて庭に出でたり」註33というその日誌によって、後世の史家は測り知れない利益を受けることになった。木戸日記のように、政治・経済・軍事の中樞にいた人々の記録が重要であることは云うまでもないが、昭和10年以降に限ってみても、『日乗』の価値は勝るとも劣らぬものがある。荷風が時局について述べている意見に加えて、熱心な社会観察者であった彼の集めた市中の噂や流言、とりわけ配給、及び公定価格制度になってからの物価の記録等は、『日乗』を太平洋戦争下の庶民の生活を伝える貴重なものにしてしているのである。

1945年（昭和20年）3月9日の時点にもどると、そこには偏奇館を焼けだされた67歳の老人がたたずんでいる光景がある。それから5カ月間、避難する先々で爆撃を受ける流浪の旅が続けられ、あたかも運命の糸に導かれるように岡山へ行きつき、終戦を迎えたのである。本稿は岡山での荷風の日常をフォローしてみたいと思うが、その前に彼の経済生活について若干検討を加える。

II 荷風の経済生活

荷風が銀行預金・株券など少なからざる恒産を所有し、いわゆる金利生活者であったことは良く知られているし、自分でも充分に意識していた。50歳の大晦日多少の感慨を持ったとみえ、彼は半生を回顧しているが、「家に些少なれど恒産あるを以て金銭のことにて人に迷惑をかけたることなし」註34と書いている。また小山内薫が荷風を非難する文章を発表した直後には、「小山内は予が生涯恒産あるが上に偶然春陽堂改造社の両書肆より巨額の印税金を獲たるを見て、羨望嫉妬のあまり常識を失ひたるものなるべし、尤も予の境遇を羨むものは小山内のみにはあらず文壇を挙げて悉く然りとなすも可なるべし」註35と次元の低い言葉を書いている。

この中林武羅夫の文章より少しさかのぼった時点で、『日乗』の中で露悪的な文章を綴っているうちはよかったが、荷風は時事新報紙上（大正15年12月3・4・5日）に「現代文学全集につきて」とい

う文章を発表する。これは、改造社が無断で円本全集の中に荷風集を収録交渉中である旨広告したことに憤激して書かれたものである。手続きの行き違いに対する非難を除いて、荷風の一番云いたかった点は、改造社の企ては薄利多売だが、文学作品についてそれを適用するのは自分の考え方に相反するということであった。すなわち、「わたくしは詩歌小説の如き閑文学は板刻して之を流布せしめる事をも無用だと思爲してゐるものである。古人は書を読まむとして購ふべき銭がない時には人より借り来つて行燈の下に之を手写した。立身出世に必要な書物すら斯くの如くであつた。況や小説の如き遊戯の閑文学をや。」^{註36}である。そして「改造社は此後わたくしに対して如何なる手段を取ろうとも正義と気概との世に存在するかぎり改造社はわたくしなる一老朽作家の意志を枉げしめることは出来ないのである。」^{註37}と結ぶ。上に引用した荷風の信念は、もともと当否を問題にされるようなものではない。そして、この信念の根底には、文学は売り物ではないのだから、それで生活を立てるべきではないという考え方があり、荷風にはそれを実践できるだけの恒産がある。したがって、荷風が前言をひるがえし、円本収録を承諾した時には、非難の聲がまき起こったのは当然であった。^{註38}この変心について『日乗』ではいろいろなことが云われているが、公表された信念から考えると、いずれも人を納得させるものではない。昭和3年、「正月廿五日、空晴れわたり、昨日にもまさりて更に暖なり、午後三菱銀行に赴き、去秋改造社及び春陽堂の両書肆より受取りたる一圓全集本印税金総額五萬圓ばかりになりたるを定期預金となす。実は舊臘より今春にかけて手堅き会社の株券を買はむと兼ねてより相知れる仲買にたのみ置きしが、思はしき株なき様子なりしを以て、定期預けとはなせしなり」^{註39}とある。その五萬圓という金額は、如何なる手段をもっても枉げることのできない荷風の信念をいとも簡単に枉げさせたのだと見ていいだろう。

当時の五萬圓というのは巨額である^{註40}。日本銀行「明治以降、本邦主要経済統計」によれば、1929年（昭和4年）を1とする1990年（平成2年）の消費者物価指数は、1,209.1であるから、単純に計算すると、それは60,455千円ということになる。また30,000円を定期預金とし、1ケ年の預金利率7%（昭和1年が7.2%）を適用すると、年間2,100円、月当り175円の金利収入である。しかし都市勤労者世帯の抽出調査によれば、世帯人員4人強の1世帯当り平均可処分所得は、1926年（昭和1年）113円19銭であり、1931年（昭和6年）には不況の影響で86円32銭に下がっている。だから30,000円も財産があれば、ゼイタクは難しいとしても一生一応の生活は出来たということになる。荷風の円本による収入は、いわば予期せざる臨時収入である。この他にも株券はあったし、予金も多額にのぼっていたであろう。だから、経済情勢の激変がなければ、荷風の暮しは万全であつたに違いない。荷風自身、日本の敗色濃厚な1944年（昭和19年）末にいたつても、「来訪者は二三の舊友のみにて文士書賈其の他の雑資全く跡を断ちたれば、余が戦時の生活は却て平安無事となりたり、加ふるに日々の食事の甚しく粗悪なるも是亦老後の健康には美食よりも却てよきやうに思はるる程なれば、銀行の貯金と諸会社よりの配当金従来如くならんには、余が老後の生涯はさして憂ふるには及ばざるべし」^{註41}と書いているのは、もし瘦我慢でなければ、事態を甘くみすぎているのであり、戦争が彼の生活基盤を根底から覆えしつあることを理解していなかったからであろう。だが、その時点から遠からずして骨の髄までそれをわからされるようになるのである。すなわち終戦翌年、昭和21年元旦の『日乗』は次のように記されているが、68歳自ら選んだこととはいえ係累のない荷風を思いやると哀切でさえある。

世の噂によれば会社の株配当金も去年六月以後は皆無となりし上今年は個人の私産にも二割以上の税

かかるといふ、今日まで余の生計は、会社の配当金にて安全なりしが今年よりは売文にて餬口の道を求めねばならぬやうになれるなり、去秋以来収入なきにあらねどそは皆戦争中徒然のあまりに筆とりし原稿、幸に焼けざりしを售りしがためなり、七十近くなりし今日より以後余は果して文明を編輯せし頃の如く筆持つことを得るや否や、六十前後に死せざりしは此上なき不幸なりき、老朽餓死の行末思へば身の毛もよだつばかりなり、朝飯を節するため褥中に書を読み、正午に近くなるを待ち階下の臺所に行き葱と人参とを煮、麦飯の粥をつくりて食ふ、飯後炭火なければ再び寢床に入り西洋紙に鉛筆もて売文の原稿をつくる。^{註42}

昭和初期に恵まれた境遇の中で書かれた感想といかに懸隔のあることか。「兎に角に平和ほどよきはなく戦争ほどおそるべきものはなし」^{註43}という荷風の感懐に同感せざるを得ない。

ここでもう一度時点を前にもどし、戦争とそれがもたらす消費物資の欠乏がいかに荷風や庶民を苦しめたかを簡単にたどってみたい。もともと経済的な国力の小さい日本が、大陸での戦火を拡大したのは1934年（昭和12年）のことであった。それからの日本は、戦争遂行のための途方もない軍需を充足するために、統制経済が導入され、経済的な合理性がつぎつぎに破壊されていく過程をたどる。^{註44}軍需優先のために、その生産者には予め利潤を保証するとともに、資材も優先的に供給されるように統制されたが、各国の経済的な封鎖のもとでは、軍需を含む総有効需要が総供給量をはるかに超過するのは当然のことであった。したがって、もし経済的な合理性が維持されていれば、全般的な大インフレーションが起こっていたはずであるが、その発現を阻んだのが消費物資の割当制、すなわち配給切符制であった。この手段によって物価の安定を計ろうとしたのである。森田優三（1963）の言葉を借りれば、物価の暗黒時代が到来した。しかし経済の合理性は、人為的な公定価格を無視して、貫徹して止まない。太平洋戦争の終末期には、本来合理的な価格である闇価格によって経済の実勢が支配され、公定価格は有名無実のものになっていく。いま、中村隆英（1989）^{註45}や森田優三（1963）^{註46}によって、戦時（経済）統制強化のプロセスのうち、本稿に関連あるものを年表風に整理すると、次の如くなる。

表1 統制強化のプロセス

1937年 7月	盧溝橋事件発生、日中戦争に拡大、臨時軍事予算 9月までに25億円成立。
8	暴利取締令改正、即日実施
1938年 3月	国家総動員法、電力国家管理法成立、4月公布
3-6	綿糸・揮発油・飼料・硫安・鉄鋼配給制となる
7	物品販売価格取締規則公布、公定価格制一般化
9	石炭配給制
12	輸出入のリンク制範囲拡大
1939年 1月	総動員法による従業者雇制限令、賃金統制令公布
7	総動員法による国民徴用令公布
8	米価統制はじまる、渇水と石炭不足による電力不足
10	総動員法による価格等統制令、地代家賃統制令、賃金臨時据置令、会社職員給与臨時措置令公布
11	生産増強、価格安定のため、中央と地方に価格統制協力会議設置

1940年 4月	物価委員会廃止。内閣に物価対策審議会，商工省に価格形成中央委員会，米・みそ・醤油・塩・マッチ・木炭・砂糖など切符制採用を決定。
7	奢侈品等製造販売制限規則（7. 7 禁令）
10	価格統制令を改正強化，会社総理統制令，銀行等資金運用令公布，中小企業・平和産業の整理統合始まる。東京のダンスホール閉鎖，
11	砂糖・マッチ切符制全国実施
1941年 4月	生活必需物資統制令公布，4月1日より六大都市に米穀通帖制・外食券制発足
	5月より木炭・酒配給制となる
6	独ソ開戦
7	米英両国の対日資産源，第三国物資の供給ほとんど杜絶する
8	米価二重価格制（生産者に奨励金を交付）の採用を決定，乗用車のガソリン使用80%規制
12	太平洋戦争勃発，生活必需物資統制令を廃して物資統制令交布。商工省，電球の切れ球との引換え販売を通牒
1942年 1月	繊維製品の配給切符制実施，食塩の通帖配給制実施
2	衣料・みそ・醤油切符制実施
5	日米文学報国会結成（会長 徳富蘇峰）
8	米軍ガダルカナル島上陸（1943年2月 日本軍撤退）
1943年 1月	生産増強勤労緊急対策決定
3	谷崎潤一郎「細雪」（『中央公論』）連載禁止
6	学徒戦時動員体制確立要綱決定。戦時衣生活簡素化実施要綱決定
9	17業種への男子就業禁止
10	神宮外苑競技場で出陣学徒壮行会
12	文部省，学童の縁故疎開促進を発表
1944年 1月	東京・名古屋に防空法による初の疎開命令，建物強制とりこわし
3	学徒勤労働員を通年と決定（8月には女子挺身勤労令公布）歌舞伎座・東京劇場休場，新聞の夕刊廃止
4	旅行制限の強化
7	『中央公論』『改造』に廃刊命令，東條内閣総辞職
	マリアナ基地のB29，東京初空襲
1945年 3月	9日～10日東京大空襲，13日名古屋，14日大阪，17日神戸に空襲。決戦教育措置要綱決定（国民学校初等科を除き4月から1年間授業停止）
8	6日広島に，9日長崎に原爆投下。15日ポツダム宣言受諾

実体を無視して出される法律・政令は，有効であり得ない。だから，矢継早に新設・改正が行われたのである。しかしこれらの法律・政令は，当時の庶民の生活に大きな影響を与え，ささやかな幸福をすべて奪い去るものだった。『日乗』の当該期間の記録には，国と国民を破滅に導く政治への怒り，呪い，嘲笑，慨嘆がいたる所に繰り返されている。その中から統制強化のプロセス全体を問題にしている記録

を一つだけ取り上げてみよう。既に荷風という名前を聞いただけで活字化が困難になり、発表のあてもない文章を綴っていた彼は、1941年（昭和16年）はじめ、次のように書く。

正月一日^{舊十二月} 風なく晴れてあたたかなり。炭もガスも乏しければ湯婆子を抱き寝床の中に一日をおくりぬ。晝は昨夜金兵衛の主人より貰ひたる餅を焼き夕は麵麩と林檎とに飢をしのぐ。思へば四疊半の女中部屋に自炊のくらしをなしてより早くも四年の歳月を過ごしたり。始は物好きにてなせし事なれど去年の秋ごろより軍人政府の専横一層甚しく世の中遂に一変せし今日になりて見れば、むさくるしく又不便なる自炊の生活その折々の感慨に適應し今はなかなか改めがたきまで姪しき心地のせらるる事多くなり行けり。時雨ふる夕、古下駄のゆるみし鼻緒切れはせぬかと気遣ひながら崖道づたひ谷町の横町に行き葱醬油など買うて帰る折など、何とも言へぬ思のすることあり。哀愁の美感に酔ふことあり。此の如き心の自由空想の自由のみはいかに暴悪なる政府の権力とても之を束縛すること能はず。人の命のあるかぎり自由は減びざるなり。註47

野口富士男（1984）は、「この最後の一句に託されている信念こそ、未曾有の悪時代のなかにあつて、彼に発表のあてのまったくない作品をえいえいとして書きつづけさせた唯一のささえであつたに相違あるまい」註48と述べているが、「発表のあてのない作品」の中に、岩波全集版で3,000頁に及ぶ『日乗』を加えて考えてもよいだろう。荷風は太平洋戦争開戦直後の11日に、「浅草辺の様子いかがならむと午後後に往きて見る。六区の人出平日と変りなくオペラ館芸人踊子の雑談亦平日の如く、不平もなく感激もなく無事平安なり。余が如き不平家の眼より見れば浅草の人達は堯舜の民の如し。仲店にて食料品をあがなひ昏暮に帰る」註49と記しているが、自覚せる不平家の耳目でとらえたことを、云うことを知らぬ民に代わって『日乗』に文字を刻みつけたのである。

1941年（昭和16年）には、荷風は63歳になっていた。係累のない老人に対し、厳しい物資不足の時期は心細い限りであつたはずである。彼自身の生活必需品の調達はどうなつていたのであろうか。結論から云うと、1943年（昭和18年）中は、品質は大いに問題であつたが、なんとか調達している。小堀四郎（洋画家）・杏奴（森 鷗外の娘）夫妻、相磯凌霜（実業家にして集書家）、谷口崑作（上野の和菓子店主）、木戸正、渡辺隣組長、岡崎 栄（西銀座の小料理家のおかみ）、杵屋五叟（大島一雄＝荷風の従弟）などが、食糧品・嗜好品・燃料などを偏奇館にしばしば届けていて、荷風は『日乗』の中に再三感謝の言葉をつらねている。

また、1943年末までは、減少する一方とはいうものの、食事を出す店があり、かねてからの習慣である外食を荷風は続けることができた。そういう外食先の中で、この時期目につくのは芝口（新橋）の酒肆金兵衛である。試みに、1943年（昭和18年）の『日乗』に出てくる「金兵衛に飯す」「金兵衛に飲む」「金兵衛に至る」といった表現を数えると100回に近い。浅草・銀座を經由して「金兵衛に至る」こともあれば、逆に金兵衛から出発することもある。偏奇館に孤独の生活を送る荷風であつたが、元来巷の子であり人は恋しいから、出歩かない生活は考えられない。その際、金兵衛は恰好の拠点であり、情報の交換場所だったのである。ほとんど毎日の出遊は、単に外食をするためだけのものではない。「風静にて暖なれば今日もまた食ふものあさらむとて千住に行く。大橋のあたりには曾て軒並に名物の佃煮売の店ありしが今は残らず戸を閉したり」註50の記述にみられるように買い出しにもつとめている。

このような荷風の生活の中で記された『日乗』は、応接にいとまなく実施される経済統制が、生活必需

品の絶対的な不足を通じてどのように庶民の生活を破壊したか、理不尽な配給割当量の当然の結果としての闇物資がいかなる価格で売買されたかをヴィヴィッドに捉えた微視的な経済実態資料である。表1の徴用令に関していえば、他ならぬ金兵衛でも男手が徴用されていく様子が、「料理場の男二人いづれも妻子あり年三十四五徴用令にて二三日中に軍需工場へ送らると云」^{註51}とか、「この程新しき法令発布せられ料理人店員会社員何にかぎらず四十歳までの男子はいや應なく軍需工場の職工に徴発せらるることになりたり。かうして居らるるのも来年三月十五日までなりと云」^{註52}とかの記述によって伺い知ることができる。徴用は人間だけのことではない。土地・家屋の強制収用、強制疎開は、日本の旗色が悪くなるにつれて頻発するようになる。その都度荷風は怒りを『日乗』におちまけているが、一つ例を挙げると、1944年（昭和19年）7月13日に相磯凌霜の話として「麻布霞町に或アパートあり。其持主貳拾五萬圓にて或工場に譲渡しの相談中突然疎開の命令を受けしたため売渡の相談は中止となり其筋より建物買上の価格六萬圓の申渡を受け驚愕のあまり発狂せしと云」^{註53}と書かれている。

生活必需品の切符による配給制度については、荷風自身の困難を伺わせる「昨今家に惣菜にすべきものなければ海苔と味噌とを副食物となして米飯に飢を忍ぶ」^{註54}というような記録が多くみられるが、それにも増して世上一般のモノ不足を随所でとり上げ、辛辣な感想を述べている^{註55}。そして自分で購入した体験と耳にした情報とから闇価格の推移を『日乗』に記録した。それらを当時の公定価格^{註56}と比較したものが表2である。公定価格が戦争も終末に近づくほど無意味なものになっていく状況を理解

表2 公定価格と荷風の闇価格

単位：円

品目	単位	昭和12年6月	昭和16年12月	昭和18年	昭和19年12月	昭和20年9月
米	10kg	3.75	4.65	N. A 5/27 22~30	5.00 4/11 74 9/27 111	5.00 2/3 295 2/11 295 2/28 111 10/1 520
砂糖	斤	0.26	0.30	N. A 5/5 3.20~4.00 5/27 4.80 6/27 5.60	0.40 4/11 20.00 11/20 65.00	0.60 2/5 72.00 10/1 128.00 160.00
鶏卵	100g	0.23	0.48	N. A 5/27 0.43	0.62 4/11 1.05 8/24 1.45 9/27 1.45	1.82 4/17 3.00 10/1 4.50
醤油	2ℓ	0.65	0.70	N. A	0.77 4/11 12.00 9/27 12.00	1.20 1/28 17.00
甘藷	貫	0.46	0.40	N. A	0.54 9/27 9.00	1.51 10/1 25.00
牛肉	100g	0.80	1.30	N. A	2.00	3.00 4/26 6.50 5/5 6.50 10/1 6.50
小麦粉	1kg	0.09	0.14	N. A	0.16	0.20 10/1 53.00
バター	0.5封度	1.38	1.94	N. A	5.66 4/1 7.60	8.80
大根	1貫	0.15	0.35	N. A	0.50 1/11 2.00	0.50

各品目の1行目が公定価格
日付は『日乗』に表れている日

できよう。

元来甘いものが好きであった荷風は砂糖の確保に大童であったが、そのほか葛粉の入手にも苦心している。^{註57}

一体、闇物資とはいかなる経路をたどって出てくるものであろうか。森田優三（1963）は六つの経路を挙げている。^{註58}

- (1)横流し……製造加工業者が製品の品質を落として配給原料に余剰を作って横流しする場合
- (2)生産者からの直接購入……農家への買出し、農家の行商等
- (3)小売商の情実縁故販売
- (4)業者相互間の物々交換……業者がそれぞれの業務用配給品を交換横流しする場合
- (5)量目の闇……主として量目をごまかして販売し、余剰分を横流しする
- (6)町会隣組等、公的機関の横流し……幽霊人口で余分の配給を受け、それを横流しする

そして、『日乗』の中にも、これらの経路に関する記述を見出すことができる。

「牛乳配達夫来り醫師の診断書なき人には牛乳を売らぬことになりたれば何卒その手続なされたしと言へり」^{註59}は(6)の変形であろうし、「午後庭を掃きあたりしに二十ばかりなる洋装の女二人門の戸をあけ一人は外に佇立し一人入来り携へたる風呂敷の結目をときかけ干瓢椎茸はいりませぬかと云ふ。値を問ふに百日貳圓なりとて紙包みにしたものをせり。……何處から来たりしやと問ふに四国の宇和島より行商に来ると言ひて去りぬ」^{註60}「隣家のおかみさんより馬鈴薯を買ふ。一貫目七圓買出し車賃三圓なり」^{註61}は(2)の例であろう。そして、荷風が行きつけの金兵衛では、「酒麦酒ともに不足なれどウイスキーの買溜めあり。魚類は高輪邊の魚問屋にて宮内省及皇族へ配給する魚の取引を一手に請負へるものありて、そこより内々闇相場にて魚少き時は鶏肉をも送り来るなり」^{註62}とカラクリを使っていた。

闇物資の成り立ちは、恐らくすべての大人が知っていたであろうが、闇値段を支払えるだけの所得があったり、資産を持つ者は限られている。もちろん荷風はその限られた人々の中に居る。だが大多数の人は闇値を支払うことができない。一世帯当り4.11人の都市勤労者世帯の実収入は、1939年（昭和14年）115円42銭である。17～20年の実収入の数字は利用不可能であるけれども、さして違いはあるまいと思われる。荷風が街談録として書いているのは徴用工の例である。「大学を卒業して後銀行会社に入り年も四十ちかくなれば地位も稍進みて一部の長となり、家には中学に通ふ児女もあり、然るに突然徴用令にて軍需工場の職工になりさがり……其の給料はむかしの俸給の四分の一位なれば中流家庭の生活をなす能はず……此れが為殆其處置に窮し涙に日を送り居る由なり。（徴集せられし者は初三個月練習中は日給貳圓。その後は一人前になりても最高百二三十圓がとまりなりと云。）……」^{註63}荷風自身は、「銀行の貯金と諸会社の配当金」があるので、「物価の騰貴測り知るべからず」「可驚可恐」といいながらも、まだ余裕が残っていた。しかし、1944年（昭和19年）も半ばを過ぎるとモノがなくなってくる。物資の大集散地であった東京から、その時期、商売をする人は姿を消す。この傾向は既に2、3年前から始まっていたが、19年に入ると、それまでなんとか営業をつづけて来た飲食店も廃業するようになる。例えば、あれだけ訪れていた金兵衛の名前は19年1月13日を最後に『日録』に現れることはないのである。

昭和19年になると、荷風はあまり外出をしなくなる。浅草とか銀座など、「われは生れて町に住む」^{註64}と詠った荷風の遊び場所あるいは散歩の場所は、軍閥政府に破壊されてしまった。偏奇館にこもることを余儀なくされるのである。そして独居する荷風の生活は、彼に好意を寄せる人たちが届ける食料や燃料によって細々と続けられ、『日乗』に「餅を恵まる」とか「米をもたせ遣はさる」のような、往年「互いに助け合わないこと」を人間関係の基本とした荷風からすれば、やはり弱々しさを感じさせる言葉が頻りにくり返されている。これは経済的にみると、荷風の蓄財が市場経済の崩壊により、無意味に近いものになっている状況の反映であると云えよう。にもかかわらず、カネがすべてであると、荷風は思い続けていた節がある。秋庭太郎（1966）は、偏奇館焼失後の約半年、荷風とともに家族同様の生活を送った菅原明朝の『荷風罹災日乗註考』や従弟大島一雄への書簡等を材料にして、荷風の当時の日常生活を刻明に追っているが、昭和20年の7月6日の段階になっても配当金の送金を依頼したり、メインバンクである「三菱銀行本店萬一罹災ノ時ハ立退先御聞合願上候」と書いているのを見ると、その金銭信仰はなみなならぬものであったと考えられる。しかし、現実にはカネの威力は失われていき、他人の親切によって命をつながざるを得ない。この矛盾は、偏奇館焼失後、岡山に至る流浪の生活の中で極点に達するのである。

Ⅲ 終戦まで

偏奇館を焼けだされてから、岡山で終戦を迎えるまでの荷風の生活は、67歳の老人にとって苛酷なものであったが、その中で『日乗』は1日たりとも休むことなく書かれている。この流離譚の部分は、当時の日本国民がなんらかの形で体験した辛苦を、荷風の個人的な体験のなかで見事に把えており、『日乗』全体のうちでもっとも精彩に富んでいる。荷風は全文を文語体で書いているのであるが、戦争の終末期を迎えて緊迫する情勢、空襲に追われて流離する彼自身の心情を表現するのに、簡潔で余韻のある文語体は、この部分において特に成功を収めている。しかし、本稿では紙数の関係もあるので、荷風の動静を年表風に整理し、その中から一つ、昭和20年7月13日の岡山市郊外、妹尾崎、平松氏訪問について考察を加える。

- 3月10日 午前4時 偏奇館炎上 代々木の従弟大島一雄宅に身を寄せる。
- 4月15日 菅原明朗・永井智子夫妻居住の東中野の国際文化アパートに転居
- 5月25日 夜 罹災。「菅原氏夫妻の日夜彈奏せしピアノの如き唯金線の一团となり糸のやうにもつれしを見るのみ」^{註65} 菅原夫妻とともにピアニスト宅孝二郎に避難
- 6月2日 菅原の郷里明石へ同行を決意。「菅原氏……今は其故郷なる播州明石の家に行くより外に為すべき道なしとて頻に同行を勧めらる、熟慮して後遂に意を決して氏の厚意にすがりて関西にさすらひ行くことになしぬ」^{註66}
- 6月3日 明石海岸の西林寺に逗留
- 6月10日 明石にも空襲あり、岡山へ移ることを決める。「夜八時菅原君細君岡山より帰り宅孝二氏既に彼地に在り、谷崎潤氏亦津山の付近に避難する由、余等先行の事思ひしよりも都合好かるべしと言ふ、依つて明後十二日未明の汽車にて岡山に行くことに決す」^{註67}
- 6月12日 岡山着
- 6月13日 岡山ホテルに宿泊
- 6月16日 弓之町松月旅館へ宿替え
- 6月28日 夜2時頃、岡山の空襲により居所を失う。「火一時に四方より起れり。……余は旭川の堤を走り鉄橋に近き河原の砂上に伏して九死に一生を得たり」^{註68}
- 6月30日 三門町2-572佐々木方に間借り。
- 7月3日 巖井三門町1-1826武南功方に移る。
- 7月13日 菅原夫妻とともに、福田村妹尾崎の平松氏を訪ねる。
- 8月13日 勝山に疎開中の谷崎潤一郎を訪問、歓談する
- 8月15日 午前11時20分勝山発の汽車で岡山へ帰る。「S君夫婦、今日正午ラヂオの放送、日米戦争突然停止せし由を公表したりと言ふ、恰も好し、日暮染物屋の婆、鶏肉葡萄酒を持来る、休戦の祝宴を張り皆々酔うて寝に就きぬ」^{註69}
- 8月27日 村田武雄一家宿泊中の総社町伊呂波旅館にしばらく逗留するつもりで赴く。「同宿人との関係追々日を経るに従ひいとほしき事の多くなりたれば、未明に岡山駅に至り汽車切符を購ひ、午後吉備郡總社町の旅館以呂波に至る」^{註70}
- 8月30日 村田武雄夫妻と携え、午後4時頃岡山発帰京の途につく。
- 8月31日 夜7時過、品川に着く。代々木駅前鈴木薬局にいる筈の大島一雄一家をたずねるが、既

に熱海の木戸正方に転居していることを知る。当夜は鈴木宅にとめてもらう。

9月1日 熱海にて大島一家と再会する。

7月13日、平松氏宅を訪れた目的は、6月16日から6月28日まで滞在した弓之町松月の未払宿賃を支払うためであった。果樹園経営の平松氏は旅館松月の女主人の兄に当り、彼女はそこへ避難していたのである。「去月廿八日 旅舎焼亡の際余は宿賃を拂ふ暇だになく逃れ去りて今日に至りしなれば、……途上の風景を見がてら尋ね行くことになせしなり。」^{註71}ここに荷風の他人に対してあくまで律気であった生活態度の表れを見ることができよう。個人の確立は契約の遵守と切り離せない。このかぎりでは西欧の市民意識は荷風の中に根づいている。だが、そういう関係は、荷風からみて外側の人との間に限られる。内側の人、家族や側近には甘え・わがままが入り交った不可解なエゴイズムで臨む。そのため、人間関係は問題をはらまざるを得ない。家族は早くに捨てたが、側近というべき人たちの交替もしばしば起こる。近づき過ぎて双方がいやな思いをして、いつしか疎遠になってしまう。偏奇館焼亡につづく6ヵ月間、側近というよりも、67歳の老人の庇護者をつとめたのは、菅原明朗・永井智子夫妻であった。浅草オペラ館で、荷風が脚本を書き、菅原が作曲し、永井が出演した歌劇「萬節情話」が上演されたが、この時期から彼らは荷風と親交をもっていたのである。お互いに住居が別であった頃は、行ったり来たり、町で会ったりで問題は顕在化しないが、荷風が東中野国際文化アパートに移り、明石・岡山と行動を共にするようになると、菅原、とくに永井は荷風の不可解な行動に悩まされることになる。『日乗』には、「同宿人との関係追々日を経るに従ひ、いとはしき事の多くなりければ……」とか、「この夜廣嶋より宅智子菅原三氏の放送あり、家の娘も曾て宅氏の門生となりしにより共に廣嶋に行きたればとてわざわざ席をもふけて余を迎ふ、蚊に攻められながらラヂオを聞く苦しみも浮世の義理の是非もなし」^{註72}と記されている程度であるが、そういうきれいごとでは済まされない人間関係の摩擦が低次元の問題をめぐって起こっていたことは、秋庭太郎（1966）等が使っている菅原明朗述稿本『荷風罹災日乗註考』に明らかである。

しかし、7月13日の妹尾崎行は、8月13日の勝山、谷崎潤一郎訪問と並んで岡山滞在中の楽しい日々であった。「此日雨後の空晴渡りて風秋の如く冷なるに乗じ……」^{註73}荷風の一行は巖井三門町から徒歩で妹尾崎を目指した。『日乗』には略図が添えられているが、それによると水田の広がる中の一本道を進み、白石橋で笹ヶ瀬川を渡り庭瀬駅付近から南下して妹尾崎に到着している。この間約2時間を要しているが、「河流、堰、堤防、石橋等の眺望一ツとして画趣を帯びざるはなし。……倉づくりなる農家の立ちつくあひだに清流盈々たる溝渠の迂曲して通ずるあり。樹蔭の棧橋に村の女の食器を洗ふあり。窓の下に繋げる田舟に児童の小魚を捕ふるあり。これ等田園の好画図は余のこの地に来つて初めて目にするところなれば徒歩のつかれるを知らず」^{註74}と賞揚している。^{註75}平松氏は福田村妹尾崎の山上に晴耕園と称する果樹園を営んでいたが、ここからは一面の水田を隔てて岡山市街、児島の山々、牛窓の人家、さらにはかすかに小豆島も見ることができると、園主は旧式の遠目鏡を出し、荷風に眺望させた。『日乗』には「余小豆島の名を聞き成島柳北が明治二年にものせし航薇日記中の風景を想起し却て一段旅愁の切なるを覚えたり」^{註76}と記されている。

荷風はかねてから成島柳北にひとかたならぬ敬意をもっていて^{註77}、大正末年から昭和初年にかけて、柳北外孫大島隆一氏から柳北の日記を借り、これを筆写している。残念なことに、この荷風の写本は偏奇館焼亡のさい失われてしまったのである。『航薇日記』については、1944年（昭和19年）11月21日の『日乗』に筆写し終った旨の記述がある。そして、戦後（9月5日）熱海の木戸正の蔵書中に『航薇日記』

を発見、驚愕して読むと同時に、熱海に杖を引くことが多かった柳北と自分の足どりの類似に「予今備陽の一邑より東行して熱海に至る」と感懐を記している。最末期の幕政の中樞にいた柳北は、江戸開城とともに33歳で隠棲し、「天地間無用の人」を自称しながら在野のジャーナリストとして後半生を送った。その彼にとって、明治2年からしばらくの間は方向が定まらない雌伏の時期であった。そのとき、妻の縁者である戸川成斉から関西への旅行をさそわれるのである。すなわち、「……戸川成斉が余の浅草森田街の草庵に来たりてこたび事有りて采邑なる備中の妹尾に赴くよしを告げ余にも共にゆく可しと勸むさらでだに京坂に一遊せんと思ふ折なれば、例の烟霞痼の動き出でて退めがなければ萬の事皆擲ちて旅の装ひをなす事とハナリぬ」^{註78}という経緯があった。この旅行には旧暦10月14日から11月28日までの約1ヶ月半が費され、柳北と成斉は悠々と岡山・香川・兵庫・大阪等を回遊している。荷風の岡山滞在の時とは季節が異なるが、妹尾を拠点に、荷風とは逆に岡山へ見物に出かけたり、撫川・庭瀬を通して高松稲荷、吉備津の宮へ参詣したりしている。

荷風はなぜ『航薇日記』にあれほどひかれたのであろうか。その答えは筆記を終えた時の荷風の感想の中にある。「今その原本を筆寫するに臨み新に感じたることは、全文にみなぎりし哀調しみじみと人の心を動かすものあり」^{註79}と記されているのがそれである。そして、荷風もまた『日乗』に哀愁をたたえないわけにはいかなかった。それどころか、風景を見ている目が空虚であり、『日乗』の風景描写も時として文語特有の陳腐に陥っている場合が多く、荷風の心象を書き出すための導入部分と見られないこともない。「軒裏に燕の巢ありて親鳥絶間なく飛去り飛来りて雛に餌を与ふ、この雛やがて生立ち秋風立つころには親鳥諸共故郷にかへるべきを思へば、余の再び東京に至るを得るは果して何時の日ならんと、流寓の身を顧み涙なきを得ず」^{註80}とか、「薇陽の山水見るに好しと雖到底余の胸底に蟠る暗愁を慰むべきに非らず」^{註81}である。しかも帰京の目途はこの時点では何も立っていない。老荷風の愁い察するに余りある。だから終戦になって「恰も好し」とか「兎に角に平和ほどよきはなく戦争ほど恐るべきものはなし」と云ったのは、掛け値なしの叫びだったのであろう。

む す び

荷風の戦後については、それを論じる余裕がない。ただ、戦後の世相・流行もまた彼の怒りを増大させるのみであった。中村真一郎(1946)は次のように書いている。「老荷風の絶望……古き日本は、此の得がたい美の司祭を、余りに疲らせ傷つけた。此の天才は……晩年を静かな休息の中に過す権利がある。豊かな自然と豊かな文明生活、例へば温暖なカリフォルニアの海に面した丘は、老詩人が「牧神の午後」を低唱して、その半生の苦闘を忘れるには最も適した環境であろう。」^{註82}一方、ドイツを見限ったトーマス・マンはカリフォルニアの風光の中で、故国の知識人からの公開質問状に対し、辛吟したうえ、「私はなぜドイツへ帰らないか」を書く。その内容は、マン特有のレトリックをまとっているが、要するに、カリフォルニアにおける快適な生活を何故放棄しなければいけないのか、さんざん不利益をこうむった後でここで利益をたのしんではいけないのか、という居直りに尽きる。だから、中村真一郎(1946)の提案はそれほどのはずれではない。若い頃の滞米・仏生活を通じて筋金入りになっている荷風の個人主義ともうまくミートするはずである。だが、根こそぎ焼きつくされた東京に郷愁を抑えられない荷風の場合、たとえばレオナルド・藤田のパリ行きのようなことがあり得たであろうか。結局、国内亡命者の立場を荷風は貫いたのであり、そのカタルシスが『断腸亭日乗』に累積されたのである。

付記： 筆者等は専門を異にするが、本学の同一学科に所属しており、永井荷風の『断腸亭日乗』にそれぞれ関心を抱いていた。学際的な研究を僭称する気持はまったくないが、協力して成ったものが上記の考察である。

註1 永井荷風（1980～1981）巻四 416頁，昭和14年10月

註2 永井荷風1879年～1959年，トーマス・マン1875～1955年

註3 トーマス・マン（1945）659頁

註4 トーマス・マン（1945）661頁

註5 トーマス・マン（1943）644頁

註6 トーマス・マン（1943）644頁

註7 トーマス・マン（1943）643頁

註8 永井荷風（1980～1981）巻五，179頁

註9 永井荷風（1980～1981）巻五，385頁

註10 トーマス・マン（1943）649頁

註11 トーマス・マン（1945）661頁

註12 永井荷風（1980～1981）巻四，29頁

註13 磯田光一（1979）67頁

磯田光一（1979）は、「モーパッサンの石像を拝す」の書誌的な経緯をつぎのように書いている。「雑誌に発表されず、いわゆる発禁本『ふらんす物語』（明治四十二年刊）に直接入れられた。そして「新編ふらんす物語」（大正四年刊）から排除されただけでなく、その後も荷風は単行本に入れることを拒み、初出から三十九年後の昭和二十三年に、重要部分を削除した形で中央公論社版『荷風全集』第四巻に入れられ、岩波版全集もこれを踏襲したのである。」（講談社文庫版59頁）

註14 磯田光一（1979）61頁

註15 永井荷風（1909 a）420頁

註16 磯田光一（1979）

註17 永井荷風（1919）12頁

註18 秋庭太郎（1966）196頁

なお、同書には次のような記述がある。「荷風自身が晩年に至って『そんな深い意味はありませんよ。赤がかった考え方というものは、人間だれでも責任のない若い時は大なり小なり持っていますよ。』と相磯凌霜編『荷風思出草』で言及してゐる。わたくしはこの件につき相磯氏に念の為め問ふたことがあるが、同氏も深い意味はなかったと答へられた。

註19 秋庭太郎（1979）208頁～9頁に次のような紹介がある。「あなたは、非精神的な社会への反撥から、それとの闘ひの絶望から江戸文化や花柳の巷に身を避けたのではありません。あなたは、元々それらがただ好きだっただけなのです。好きなことをし、好きな趣味に耽ることがそれ自身として周囲の社会に対立しなければならなかったといふだけのことです。」（佐々木基一執筆「永井荷風氏へ」『公開状——若き世代の立場から』1947年刊）

註20 永井荷風（1909 b）56頁

- 註21 トーマス・マン (1940～1950) 584頁～656頁
- 註22 秋庭太郎 (1966) 258頁
- 註23 この売却を決心するに至る経緯は、『断腸亭日乗』に細々と述べられているが、「人間は互に不可解な孤立に過ぎない」とする個人主義が、肉親、親類縁者に対し、さらにとぎすまされて適用されている有り様が伺われて興味深い。とくに、荷風の分家した弟一威三郎、彼と同居する母恒にとって、この事件およびネチネチと後を引く荷風の態度は不可解を通り越して精神的暴力に近いものであったと思われる。『断腸亭日乗』の大正7年8月8日、11月11日、11月12日、11月13日、11月15日、11月22日、12月4日、12月5日の頁を参照されたい。
- 註24 永井荷風 (1980～1981) 卷三, 136頁
- 註25 同上
- 註26 秋庭太郎 (1966) 281頁
- 註27 永井荷風 (1980～1981) 卷一, 74頁
- 註28 永井荷風 (1980～1981) 卷一, 212頁
- 註29 永井荷風 (1980～1981) 卷六, 233頁
- 註30 永井荷風 (1980～1981) 卷五, 176頁
- 註31 永井荷風 (1980～1981) 卷六, 20頁
- 註32 秋庭太郎 (1970) 498頁
- 註33 永井荷風 (1980～1981) 卷六, 19頁
- 註34 永井荷風 (1980～1981) 卷二, 312頁
- 註35 永井荷風 (1980～1981) 卷二, 260頁
- 註36 永井荷風 (1924) 156頁
- 註37 永井荷風 (1924) 157頁
- 註38 前に触れた小山内薫の文章も、荷風の態度の変化を批判するものであったし、当時『新潮』誌の編集にたずさわっていた中村武羅夫も「読売新聞」(昭和2年11月5、6日)でつぎのように述べている。「荷風氏の言ふが如く、言行の不一致を以て、直に破廉恥と言い得るならば、荷風氏の如きは最も大なる破廉恥漢でなければならぬ。荷風氏は、先に、時事新報紙上に於いて数日間に亙り、改造社の日本文学全集に自己の著作を加へざることを天下に公約して置きながら、その舌の根もまだ乾かないと言つてもいい数ヶ月を出でない中に、改造社から日本文学全集の一冊として自己の著作を出版したではないか。」——秋庭太郎 (1976) 341頁
- 註39 永井荷風 (1980～1981) 卷二, 211頁
 なお、一圓全集本中の荷風集刊行状況は次の通りである。
 昭和2年7月、春陽堂版『明治大正文学全集』第卅一卷『永井荷風篇』
 昭和2年9月、改造社版『現代日本文学全集』第廿二卷『永井荷風集』
- 註40 改造社版円本に関して博文館とトラブルがあつて著作権侵害を云い立てられ、示談で収拾可能になった時点で、「余はもともと改造社の一圓本に加入することを好まず、一時新聞に投書して同社を攻撃したる事もありしが、本年六月に至り邦技完二氏の周旋もあり、同社の希望を入れし次第なれば、今回同社より受取りたる金品は其額莫大なれども始より無きものと思へばそれまでのことなり。因つて此の金のつかひ處に博文館と訴訟をかまへ、彼が曲事を天下に知らしむるも

亦一興なるべし」と書いているのは、到底本心とは思えない。永井荷風（1980～1981）巻二、164頁

- 註41 永井荷風（1980～1981）巻五、509頁
- 註42 永井荷風（1980～1981）巻六、117頁
- 註43 永井荷風（1980～1981）巻六、66頁
- 註44 戦時経済に関する著作は多いが、ここでは、戦中から直後にかけて書かれた鬼頭仁三郎（1948）を挙げておく。
- 註45 中村隆英（1989）12～13頁
- 註46 森田優三（1963）84～91頁
- 註47 永井荷風（1980～1981）巻五、129頁
- 註48 野口富士男（1984）181頁
- 註49 永井荷風（1980～1981）巻五、239頁
- 註50 永井荷風（1980～1981）巻五、315頁
- 註51 永井荷風（1980～1981）巻五、284頁 昭和17年8月12日
- 註52 永井荷風（1980～1981）巻五、383頁 昭和18年9月23日
- 註53 永井荷風（1980～1981）巻五、467頁
- 註54 永井荷風（1980～1981）巻五、395頁 昭和18年10月23日
- 註55 一つだけ例を挙げておく。「塵紙石餘菌磨配給切符制になるべしとの風説あり。市中より此等の品昨夜中に消失せたりと云。塵紙懐紙なくなり銭湯休日多くなる。戦勝国婦女子の不潔なること察すべきなり。」永井荷風（1980～1981）巻五、250頁、昭和17年1月23日。
- 註56 森田優三（1963）103頁
- 註57 「初更金兵衛に至り夕飯を喫す。葛粉一袋替後小谷金参圓なり。金兵衛のかみさん余がために新潟よりつてをたよりにて購ひ求めしなりと云ふ。新政以後東京市内にて葛を賣るところ一軒もなし。」永井荷風（1980～1981）巻五、174頁 昭和16年6月初6
- 註58 森田優三（1963）101頁
- 註59 永井荷風（1980～1981）巻五、272頁 昭和17年6月11日
- 註60 永井荷風（1980～1981）巻五、355頁 昭和18年6月11日
- 註61 永井荷風（1980～1981）巻五、508頁 昭和19年12月22日
- 註62 永井荷風（1980～1981）巻五、375頁 昭和18年8月28日
- 註63 永井荷風（1980～1981）巻五、395頁～396頁
- 註64 野口富士男（1984）が『偏奇館吟草』の中から、荷風の作品の原点と見た言葉。われは生れて町に住み 濁りし水のくされ行く 岸に杖ひく身にぞありける
- 註65 永井荷風（1980～1981）巻六、38頁
- 註66 永井荷風（1980～1981）巻六、39頁～40頁
- 註67 永井荷風（1980～1981）巻六、44頁
- 註68 永井荷風（1980～1981）巻六、51頁
- 註69 永井荷風（1980～1981）巻六、64頁
- 註70 永井荷風（1980～1981）巻六、69頁

- 註71 永井荷風（1980～1981）巻六，53頁
 註72 永井荷風（1980～1981）巻六，60頁
 註73 永井荷風（1980～1981）巻六，53頁
 註74 永井荷風（1980～1981）巻六，53頁～54頁
 註75 それから50年近くを経た庭瀬あたりの現在のことからすると、まったくイメージできないような風景である。岡山あるいは倉敷のベッド・タウンとして人口と住宅の増加数は著しく、岡山までのJR線路に沿ってほとんど間隙なく家屋が建てられている。わずかに残された用水に浮ぶ舟に往時をしのぶだけである。
 註76 永井荷風（1980～1981）巻六，55頁
 註77 前田 愛（1990）は、「柳北と荷風——エピローグ風に——」という章で、柳北から荷風が引き継いだものを明らかにするのが次の課題だと述べている。
 註78 塩田良平編（1969）96頁
 註79 永井荷風（1980～1981）巻五，502頁 昭和19年11月21日
 註80 永井荷風（1980～1981）巻六，48頁 昭和20年6月21日
 註81 永井荷風（1980～1981）巻六，55頁 昭和20年7月13日
 註82 中村眞一郎（1946）

文 献

- 秋庭太郎，1966，『考証 永井荷風』 岩波書店
 秋庭太郎，1976，『永井荷風伝』 春陽堂書店
 秋庭太郎，1979，『荷風外伝』 春陽堂書店
 磯田光一，1979，『永井荷風』 講談社，文庫版1989年
 鬼頭仁三郎，1948，『物価の理論』 東洋経済新報社
 中村隆英，1989，「概説1937-54年」中村隆英編『日本経済史7——「計画化」と「民主化」——』岩波書店
 永井荷風，1909 a，「祭の夜がたり」『荷風全集 第三巻』岩波書店 1963年
 永井荷風，1909 b，「監獄署の裏」『荷風全集 第四巻』岩波書店 1964年
 永井荷風，1919，「花火」『荷風全集 第15巻』岩波書店 1963年
 永井荷風，1924，「現代文学全集につきて」『荷風全集，第二六巻』岩波書店 1965年
 永井荷風，1980～1981，『断腸亭日乗』巻一～巻七，岩波書店
 中村眞一郎，1946，「七十才の論理——荷風と我等——」，加藤周一，中村眞一郎，福永武彦『1946・文学的考察』
 成島柳北，1869，「航薇日記」，塩田良平編『明治文学全集4，成島柳北，服部撫松，栗本鋤雲集』筑摩書房，1969
 野口富士男，1984，『わが荷風』講談社
 トーマス・マン，1943，池田紘一訳「運命と使命」，『トーマス・マン全集』第11巻，新潮社 1972年
 トーマス・マン，1945，猿田直訳「私はなぜドイツに帰らないか」，『トーマス・マン全集』第11巻，新

潮社，1972年

トーマス・マン，1940～1950，伊藤利男訳「ドイツの聴取者諸君（抄）——ドイツへむけて五十五回のラジオ放送——」『トーマス・マン全集』第10巻，新潮社，1972年

前田愛，1990，『成島柳北』朝日新聞社

森田優三，1963，「戦時の物価」，森田優三編『物価—日本経済の分析2』春秋社